

原田哲朗編

原田哲朗編

一月一四日（土）

田棟のスタバでレジ前の列に並んでいたら、二つ前で注文を終えたメガネのおじさんが僕を見て、「この間はどうぞ」と声をかけてきた。「そういえば、この学生さんだったつけ」と軽く挨拶を交わし、熱々のコーヒーを持って商工会議所の方へ歩いていく姿を尻目に自分の注文を済ませる。

「流石は経営学部。いや、英才教育の賜物か」

「ご立派だねえ」と呟いて、先に座っていた東堂は自分のコーヒー代を差し出した。

「そりやどうも。まあ、そういうのも春までだけ」

「それで心理学ってのは恵まれすぎっていうか、天邪鬼っていうか。ボンボンの戯れよ」

東堂は少し声のボリュームを上げて言う。隣の座席では、心理学部のテスト勉強をしているらしい。他の席からも冷ややかな視線が送られてくる。「すみません」と軽く頭を下げ、東堂には声を抑えるよう手で示す。

「お前はいい友達だと思っただけだなあ」

「学部を移ったって、友達は友達だろ」

「ちやつかりネットワーキングしてる奴のセリフなんて、信じられるか」

言葉とは裏腹に、不貞腐れた表情を浮かべている。

「心理分析してんだろ？」

「バレた？」

東堂の握り拳が小さく肩に押し込まれる。周囲の迷惑そうな視線が流石に気になった。空になった二人分のカップを片付け、そのまま公園の方へ出る。まだまだ外は刺すように寒い。

元気に走り回る近所の子供たちを避けながら、駐輪場の方へ歩を進める。ぐだぐだ言う割に、東堂は隣を歩く。その視線は、少し先の立て看板を見ているらしい。

「一回ぐらい、ああ言う店で飲んでみたいけど、いい値段するなあ」

「黄金のエビスビールと様々なフレイバー、色とりどりのビアカクテルが並んだ

メニューは、酒が飲めなくても見て楽しい。

「量は少なかったけど、結構旨かったよ」

この前食べたハンバーグは、中々良かった。次来るときは、ビールも飲んでみたい。足を止めて値段を確かめていると、隣から強い視線を感じた。東堂の目は怒りの色が見える。

「いや、バイト先の懇親会でさ」

「へー。ただ酒か？」

「酒は飲んでないよ。誕生日ままだし」

「え？ いつ？」

「二月三十一日。二〇〇三年の早生まれ」

律儀に守る必要もなかったが、大人だらけの仕事の場、学内の会場とあつては流石に控える。「結局ただ飯だろ」と噴火しそうな東堂は、さっきまでの怒りを忘れたように、爛々と目を輝かせている。

「じゃあ、今度飲みに行こう。原田の誕生日祝いに」

東堂の勢いに、「いや、いい」と断る意思是追いやられる。完璧にど平日、一人の誕生日と思っていたけど、全て彼の段取りで押し切られそうな予感。

「俺の友達も呼んでいい？ サシ飲みじゃ寂しいし」

嫌だと言っても、彼は止まらないだろう。東堂はスマホでメッセージを打ち込みながら、足早に自分の原付へ向かう。東堂に遅れて、僕は自分の自転車を駐輪場から引っ張り出した。

「じゃあ、そういうことだから。段取りしとくわ」

お手柔らかに、と声をかける間もなく、東堂はヘルメットをかぶった。流れるような動きで目の前の車道へ出ていく。明るい「じゃあな」の声を残し、東堂のバイクは交差点を右に曲がった。

初出 令和三年二月二五日 ノベルアップ+にて公開

一月二三日（月）

Slackで、森田さんからのDMが届く。個人のやり取りは珍しいと言うか、コレが最初だ。通知を辿ると、「フードトラックのケータリング事業とか、認定保育園と看護師とのマッチングサービスとか、どう思う？」とのメッセージ。

Macの画面を見て、メッセージの意味を考えると、横から藤堂が覗き込んだ。

「どう思うって、随分フワつとしてるな」

「まあ、具体的な仕事の話じゃないんだと思う」

仕事の話ならそれ用のチャンネルに書き込むだろうし、案件の相談、確度の高い知人からの持ち込みなら、雑談用のチャンネルで「大人の意見」をやり取りしてもらった方が早い。それに、普段の森田さんなら、目的も意味も明確な、取り違えにくいメッセージを送ってくれる。

「お金の目処は立っていないけど、経営学部的にどう思うか、広い意味で聞いているんじゃない？」

「なるほど。向こうは向こうで、それなりの答えも持つてる、もしくは考えている最中か」

藤堂は芝居つ気たつぷりに眉間にシワを寄せ、「難しいねえ」と肩をすくめる。彼は自分の腕時計を見て、席から立ち上がった。そろそろ次の講義、テストが始まる。机に広げたMacとノート、筆記用具をカバンに詰め込んで僕も立ち上がる。学食から目的の教室へ移動しながら、東堂に聞いてみる。

「で、どう思う？」

「お前の課題だろ？ オレには他人事さ。それに、」

藤堂は僕に向け、顔の前で指を擦り合わせる。

「タダの相談事ほど高いもんはない。自分にとつても、相手にとつても。俺らが学生だと思われているなら、余計にな」

普段の言動や仕草で見誤るけど、藤堂も流石に同級生。言葉を飲んでジッと見ていると、「なんだよ」といつもの「らしい」反応が返ってくる。

「その上で言うなら、なくてはならないけど、需要や可能性はそこまで大きくないかな。

専門家、当事者だったらやるだろうけど、俺は手を出さないね」

「オレもそんな気がする。調査、分析で変わるかもだけど。まあ、後でヒアリングしてみる」

藤堂が先に教室に入り、広い教室の真ん中後ろの空席を確保する。僕はテスト用に間を開けて、席を抑えた。

「で、今のバイトはそういうのをやってんのか」

「パパッとサイト作ったり、サービスを踏まえたアプリ、システムを考えたり、ね。レイメイドの、最低限のマーケティングならすぐできるよ」

「へー。優秀なこと」

同業の先輩、それもバイトじゃなくて本業でやってる森田さんなら、自分よりもはるかに分かっていそうだけど、わざわざ効いてきたのは僕なりの意見、僕なりの視座が欲しいから、だろうか。

藤堂と共にテストを受け、回答のレポートを書きながら、全く関係ないことも考えている。自分なりにできうる精度の高い資料を作ってみて、頓珍漢かもしれないけどデイスカッションしてみよう。可能なら、武藤さんや安藤さんも巻き込んでみたい。

気がつけば、あつという間にテストを終えて、帰り支度を整えていた。この後、図書室に寄ってみて、関連資料があるか見てみよう。

「こんだけ良い顔してんのに、心理学部生になるのか」

藤堂は心底残念そうに呟いた。「先に帰る」と藤堂に言われ、僕は図書室の前で独りになった。

初出 令和三年二月一八日 ノベルアップ+にて公開

二月一日(水)

向かいの席でホットコーヒーを飲む瑞希さんは、隣の席に置いた大きな紙袋を見た。

「本当に、半分出してもらって良かったんですか？」

紙袋の中から、プレゼント用の包装紙とリボンが覗いている。

「お兄さん、えーつと、」

「一輝？」

「そう、一輝さんにはお世話になってるんで」

月初に安くない出費は痛くないといえば嘘になるが、取引先の担当者が誕生日だと言うのなら、出さざるを得ない。この間奢られたランチもそのまんまだし……。

瑞希さんからのリアクションは特になく、二人揃って黙ったまま、賑やかなフードコートの中でコーヒーを飲んでいる。平日の夕方とはいえ、早めの夕食を取る近隣のサラリーマンや、親子連れでハンバーガーやフライドチキンにかじりついている姿もチラホラ見える。

「ご兄弟は、一輝さんと晃さんのお二人なんですか？」

コーヒーで口を湿らせたのに、声が少々上ずった。瑞希さんはそれを気にも留めない様子で、頷いた。「原田さんは？」と会話をつなぐ意思を示してくれた。

「三つ下に妹が一人」

「じゃあ、高校生？」

記憶が定かではないが、そうだった気がする。文字のやり取りもしばらくしていないし、顔も見えていないから、実家にいるときの印象から更新されていない。

「一輝さんも早生まれ、水瓶座だとは知らなかった」

「一輝さん、も？」

「いや、僕も昨日誕生日で。つて、お兄さんから聞きませんでした？」

瑞希さんは首を振った。昨日、藤堂が連れてきた幼なじみのサッカー友達、浪川晃から、「明日、妹と映画に行ってくれ」と言われて今に至るのに。雑な投げ方に苛立ちを募らせかけたが、見知らぬ男と行動を共にしてくれた彼女に罪はな

い。横を向いて、呼気と共に負の感情を吐き出した。

「じゃあ、お祝いしないと」

瑞希さんは立ち上がり、空っぽらしい蓋付きのコーヒーカーップを手を取った。

「今日のお礼もしたいんで」

僕が一人で、「えっ?」とか「おっ?」とか言ってる間に、彼女は僕のカップを指して、「もういいですか?」と訊く。僕が小さく頷くと、自分のカップと共にゴミ箱へ捨てに行った。近くの水道で手を洗い、席まで戻ってくる。

「ほら。行きますよ」

彼女は紙袋を僕に押しつけ、腕を引つ張って強引に立たせると、そのまま食品売り場の方へ引つ張っていく。僕は転けないようにバランスをとりながら、身体の向きを変えて隣を歩く。

「ケーキ二つと、晩ご飯の材料買わないと」

「えっ?」

「私に作れるご飯なんて、たかが知れてますけどね」

少し下から僕を見上げ、瑞希さんは笑ってみせた。

「いや、うち、一人だし」

僕のささやかな抵抗を意に介さず、瑞希さんはカートと、買い物カゴを取りに行く。ガラガラと音を立てながら、僕の隣までカートを引き戻ってくる。

「だから、節約、節約」

彼女は強引に僕の手とカートを引いて、食品売り場へ先導する。青果コーナーで残り少なくなった玉ねぎやら人参やらを手には、見比べながら選んでいく。真剣な眼差しでああでもない、こうでもない値段を気にしながら買い物する様子は、なんだかとても愛おしく見えた。

初出 令和三年二月一九日 ノベルアップ+にて公開

三月一〇日（金）

一輝さんは入り口横の冷蔵庫からビールを選び、店員さんに渡すと僕らのテーブルまで戻ってきた。斜め向かいに座る沙綾さんと二人だけなのは、まだなんとなく背筋が伸びる気がする。

店員さんがグラスに注いだビールと、さっきの瓶を持ってくる。一輝さんはちよつと黒いビールをグツと流し込んだ。沙綾さんは瓶のラベルを眺め、一輝さんが手を離れたグラスに口をつけた。

「結構甘いのね。これなら哲朗くんも飲めるんじゃない？」

彼女は口元を拭いながら、ビールの入ったグラスを差し出した。手振りで辞退を示すと、「ふーん。そういうの、気にする感じ？」と笑みを浮かべながら、一輝さんの前にグラスを戻した。

「あんまりいじめてやるなよ」

「大事な妹の彼氏だし？ ね、もうやった？」

一輝さんの表情が一瞬固まる。全力で頭を振って否定する。「冗談、冗談」と沙綾さんは笑みを浮かべるものの、鋭い視線は僕の中から離れない。曖昧な笑顔を作り、一呼吸置いてから視線をグラスに移し、一口飲んだ。ホワイトビールだからそんなに苦くないと書いてあったのに、自分には十分苦い。

「次は、どうしよっかな」

沙綾さんは自分のビールを飲み干して、冷蔵庫の方へ歩いていく。

一輝さんは声を少し落として、「なんか、ごめんな」と囁いた。

「こっちのチョンボもカバーしてもらったお礼だったのに」

「いえいえ。こちらこそ、いつも奢ってもらって」

「いいって、いいって。どんどん食べて」

「じゃあ、いただきます」と改めて箸を持ち、目の前の肴に手を付ける。牛肉のしぐれ煮が豊かな風味と甘味を口いっぱいに拡げてくれるのに、添えられている葉わさびがそれなりに辛い。鼻にくる辛さに耐えてビールを飲むものの、やっぱり辛い。大きい方のグラスを選んだのは、失敗だったかもしれない。

「今度は緑？」

一輝さんの視線は、僕の後ろを見ていた。沙綾さんが新しいビールを持ってテーブルへ戻ってくる。手元のグラスには緑のビールが注がれている。

「そ、抹茶」

「抹茶といい、桜といい」

「いいじゃん、春らしくって」

沙綾さんの後ろについてきた店員さんは、ポテトフライとサラダを置くと、空いたグラスをもってカウンターの向こうへ帰っていった。

「みいちゃんもいたら良かったのに」

沙綾さんは緑のビールを一輝さんに勧めながら言う。彼はそれを一口飲んで、

「あいつの誕生日はまだ先だよ」と答えた。

「誤差みたいなもんよ」

「いやいや、お店に迷惑かかるから」

「じゃ、手土産持って実家で飲ませるか。そのときは、哲朗くんも一緒に行こ」

一輝さんの表情が微妙に濁った気がするけど、それ以上に僕へ向けられた沙綾さんの圧が強い。視線と近さにうろたえている間に、「ね？」と念押しが加えられる。

「大丈夫、大丈夫。杏より梅が安いつて」

沙綾さんは一輝さんの背中を軽く叩いて、ご機嫌に笑う。一輝さんの顔に「うわあ」と書いてあるような気がしたけど、それは酔っ払いに聞かせるためのワドセンスに関してなのか、僕にはよく分からなかった。

「お嬢さんとおつきあいさせてもらってます、つてちゃんと」

「いや、彼氏とかじゃないですよ」

沙綾さんの言葉が途切れる前に、言ってる。そう、彼氏とかじゃない。彼女の手が柔らかいこととか、その小ささとかは先週知ったけど、彼氏とかじゃない。二人でひらパーに行ったぐらいはなんともない。そう自分に言い聞かせながらも、細心の注意を払いながら目の前の二人と向き合った。酔っ払ってなくても厄介な人と近々一緒に住むのは大変だろうな、と思いを馳せながら、口を潤すためにビールを飲んだ。

三月一九日(日)

「で、話ってなんだっけ？」

いつものように、作業着姿の晃くんは、今運ばれてきた串を摘み、串に刺さっていたささみを一気に食べた。スムーズな動きで旨そうにビールを飲む。

「瑞希さんのことなんですけど、」

「え、もうやった？」

「いや、そういう話じゃなくて」

「できちゃった、じゃないよな」

晃くんの目つきが鋭くなる。心なしか、ジョッキを持つ肩にも力が入ったように見えた。全力で頭を振って否定する。

「じゃあ、何の問題もない。妹の貞操とか、興味ないしな」

晃くんはメニューを眺め、次に何を頼むか検討し始めた。僕の方を見て、「どうする？」と訊いてきたけど、「僕のことは気にしないで、好きなように頼んで」と答えた。

「いや、割り勘だし」

「いやいや、コッチから呼び出したんだし」

「同級生相手に、無理すんなって。で、どうする？」

「じゃあ、コレかな」

晃くんが既に呼んでいた店員さんに、メニューを指して注文する。

「山芋の鉄板焼き？ 随分、健康的なこと」

「こういう時じゃないと、食べないし」

独り暮らしで、他の根菜ならまだしも、山芋を買うことはない。串も目ぼしいものは一通り頼んだし、お腹もそれなりに膨れてきた。晃くんもそろそろ締めるつもりなのか、釜飯をオーダーしていた。

彼はメニューを戻し、ビールを一口飲んで喉を湿らせた。

「あんたと瑞希が友達だろうが、一線越えようが、二人でよろしくやってくれれば、それで十分。聡太が義理の弟になるより、百万倍マシだ」

藤堂聡太とは晃くんの方が付き合いが長いだろうに、悲しい評価を下されてい

る。確かにアイツが友達なのはいいとして、親戚になるのは自分も嫌かもしれない。

「一線越えるときは、その前に挨拶はしといてくれよ。オレはいいけど、親父がね」

晃くんはすっかり冷えたポテトフライを摘み、ケチャップをすくった。

「ま、親父が面倒なのはお互い様よ」

「ははは。そうだね」

自分でも嫌になりそうな渴いた笑いが口から漏れる。美桜と付き合う人は大変だろうな。僕の場合も面倒かもしれないけど、瑞希さんなら大丈夫な気がする。

そうこうしているうちに、山芋の鉄板焼きが運ばれてきた。晃くんが注文したスライストマトも一緒に運ばれてきた。

「そっちも野菜？」

「こういう時じゃないと、食べないんだよ」

晃くんはたつぷりマヨネーズを乗せて、トマトを頬張った。今度は箸の先にマヨネーズをつけ、それだけを舐めてビールを飲んだ。

「ケチャップとか、マヨネーズとか、好きなんだ」

「好きっていうか、物珍しい、かな。家でも外でも和食が多いし、兄貴もいた時は争奪戦だったし……」

「へー」

そう言えば、焼き鳥が届いた時も素早くパパッと食べてたな。職人らしい早飯かとも思ったけど、そういう影響があるのかな？

「みいちゃんは普通に食べてた気がするけど……」

「あいつは婆さんがね」

晃くんは急に、何かいいいたような表情を浮かべ、「へええ。みいちゃん、ね」とねっとりした口調で言った。

「やっぱり、詳しく聞かせてもらおうか」

晃くんはグツと身を乗り出した。壁にかかった時計に目をやっても、釜飯が出来上がるまでは、まだ時間がかかる。目の前を通りかかった店員さんを呼び止め、メニューのドリンクページを開き、追加のビールをオーダーした。

四月一五日（土）

学食のいつもの席で、いつものように弁当を広げる。ぼーっと目の前に広がる光景を眺めながら、焦点を合わせることもなく、ただただぼんやり頭を休める。

なんだかんだと、色んなものに首を突っ込んでいて、実家にそれほど頼らなくても苦もなく生活できているのと、楽しいのは間違いないが、仕事と仕事未満と勉強との狭間で、今年に入って休まる瞬間がめっきり減ってしまった。

転部によるキャッチアップも必死にやらなきゃいけないけど、みいちゃんたちの「コビトカバチャンネル」も手は抜きたくない。Zサイズの業務も、年度末を越えて少し落ち着きつつあるけど、GW明けぐらいまでは気が抜けないとなると、ココで昼食を取るタイミングと授業ぐらいしか、心も体も休まる時間がない気がする。

「えーつと、原田くん、だったよね？」

割と綺麗に巻けた気がする卵焼きをつまんでいると、後ろから声をかけられた。そちらに顔を向けると、さっきの授業で同じ班だった女子、

「たしか——」

「上坂。上坂碧。ちゃんと自己紹介したんだけど、聞いてなかったでしょ」

澁刺とした、いかにもな女子大生。取り巻き、という表現は失礼だろうけど、上坂さんの後ろに控えている感のある、キリッとした印象の背の高い女性が青柳さんで、その隣にいるスポーティな印象の女性が鈴木さん。確かに、グループワークの冒頭で自己紹介し合った気はするけど、顔と名前とを一致させるだけの興味は湧かなかった。

「隣、いい？」

上坂さんが、僕の向かいの席を指す。土曜日とは言え、それなりに座席が埋まっている学食で、奇跡的に人数分の席が空いていた。少し離れたところにも四人掛けの空席は見えるけど、無理やり断る理由、というか気力がない。

彼女は僕の返事を待つことなく、他の二人と共に僕の隣へ座った。上坂さんの醸すイケイケな雰囲気、主張の強い見た目に、少々の緊張が走る。化粧品か香水の匂いがフワッと鼻先をくすぐった。

彼女らは「いただきます」と一齐に食事を取り始めた。三者三様に、メニューを選んだらしく、それぞれ何がどうだのと、楽しそうにレポートし合っている。

「原田くんは、お弁当なんだ。お母さんの手作り？」

上坂さんが僕の方を見た。近さにドギマギしながら、「自炊だよ」と答えた。

彼女は、弁当のおかずを一つずつ指して、「コレも？ コレも？」と訊いた。

一々頷いて答えると、「へー、凄い」と言った。

「この辺、ちよつともらつてもいい？」

上坂さんは、生姜焼きの付け合わせに入れたポテトサラダの一角を丸く示した。

答えを迷っていると、「冗談、冗談」と彼女は笑った。

「でも、今度何か食べさせてよ。材料費は払うから」

「碧だけ、ずるい」と鈴木さんが口を尖らせた。

「その時は、私たちもお相伴に与らせてもらつていい？」

青柳さんがやや細い目を輝かせて言った。

「人に食べさせるようなもんじゃないよ」

「えー。残念」

上坂さんたちは、心底残念そうな表情を作った。その揃いつぶりが可笑しかったのか、すぐに笑い声が飛び交った。

楽しそうに笑う女子大生の中に放り込まれた僕は、全然食事が進まない。何をどうしてこうなったのか。昼休みの間に思い当たる節は見つけられそうになかった。

初出 令和三年五月五日 ノベルアップ+にて公開

五月八日(月)

授業中の内職も順調に進み、授業そのものも卒なくこなした。あとは仕上がったデータのアップロードと、Stackでの共有ができれば一つ片付く。まだ時間には余裕があるし、帰宅後にゆっくりやろうと思ったのに、あと少しで家というところで、上坂さんに捕まった。

先々週は帰り際に捕まってしまったから、ちよっぴり警戒して帰ってきたのに、茨高すぐの古びた本屋の前でばったり出会った。自転車でそのまま走り去っても良かったのに、なぜか気が引けて自宅の方まで一緒に歩いてきてしまった。

で、なぜかそのままアレよアレよと、部屋の中に押し入られてしまった。先々週も取り巻きっぽい青柳さん、鈴木さんとともに家の前までやってきて、彼女だけ僕の部屋まで着いてきている。一人暮らしの狭い部屋に、二人つきりというのは落ち着かない。

彼女は「ちよつと暑いね」というと、自分の鞆を置き、財布だけ持ってどこかへ行ってしまった。一人で困惑していても仕方ないし、とりあえず手を洗い、机の前まで行ってMacを立ち上げる。Stackで作業に関して連絡をしていると、上坂さんがビニール袋を下げて戻ってきた。

「おおい、哲朗くん」

台所の方からドアを開け、可愛らしい顔を覗かせた。

「あ、ごめんなさい。お仕事中だった？」

僕は「いや、大丈夫だよ」と答えつつ、部屋の中を極力見せないように台所へ移動した。後ろ手に扉を閉めるが、台所の狭い空間に二人でいる方が緊張するな。判断を誤ったか。

上坂さんは僕のことなどさして気にかける様子もなく、コンビニで買ってきたドリンク、お酒を冷蔵庫に詰め込んでいく。残った二本のうち一本を僕に差し出し、自分はそのまま手元の缶を空けて口をつけた。狭い台所で立ったまま、極々喉を鳴らしながら豪快にビールを飲んでいく。

さつきよりちよつと赤くなつた顔で、僕の顔を見上げる。

「あれ、飲まないの？」

「ああ、うん。まだ、仕事があるから」

胸ポケットのスマホも震えて教えてくれる。もう少ししたら、次の動画について打ち合わせをするために、みいちゃんがやってくる。

「私の酒は飲めないんだ」

彼女はビールを片手に、僕の方へ身体をグッと寄せてくる。狭い台所では後退りのしようもない。暖かくて柔らかいものが押しつけられ、生理的な怒張が下腹部で存在感を主張している。

「そ、そういうのは止めようって約束したじゃないか」

「ああ。お友達のままです。そういうのはしちゃダメなの？」

彼女は舐めるような目付きで、吐息がかかりそうな近さで見つめてくる。僕は拳をグッと握りしめ、血と意識を必死に拡散させる。永遠にも感じられる数秒間、ジツと硬直していると、僕にかけられていた体重がフツと消えた。熱いぐらいの熱もスツと遠のく。

「冗談、冗談」

上坂さんはケラケラ笑って、手に持ったままだったビールに口をつけた。

「そんなにあの子が大事なんだ。立派だけど、ツマンナイのね」

彼女はビールの残りをグッと飲み干すと、中を適当に洗ってから分別してある袋に投げ入れた。自分の鞆を持って、「じゃあ、帰る」と言った。

「ああ、どうも」

上坂さんはドアを開けると、扉の向こうで誰かとしやべっている。彼女は僕に「じゃあね」と笑顔で手を振って、そのまま靴音を鳴らしながら遠ざかっていった。入れ替わりに玄関に姿を現したのは、みいちゃん。

台所に残っているコンビニの袋に、未開封の缶ビール。そこらへんに漂っている気がする、ちよつぴり蒸し暑そうな空気を、一刻も早く外に出したい。みいちゃんは険しい表情のまま、玄関の中に一歩入って後ろ手にゆっくりと扉を閉めた。

初出 令和三年五月一四日 ノベルアップ+にて公開

五月三一日(水)

二コマ目の課題をサツと提出し、早めに学食へ移動した。いつもより少し広めの場所を確保して、ちよつと早めに弁当を広げる。

「おお、哲朗じゃん」

コンビニから出てきた藤堂と目が合った。彼は本を数冊手で持って、僕の方に近づいてくる。

「今日も相変わらず、弁当なんだな」

「まあね。学部が変わったって、何にも変わらないさ」

藤堂は向かいの席に手をかけ、スツと腰を下ろした。僕の顔を少し見るなり、「そうか？」と言った。

「ちよつと疲れてるように見えるけど。勉強のし過ぎか？」

「え、そんなにひどい？」

僕はスマホを取り出して、インカメに切り替えた。自分では何かが変わったようには見えないが、周りにしか分からないものでもあるのだろうか。

「おいしい、哲朗くん」

教室へ通じる廊下の向こうから、黄色い声が聞こえて来た。賑やかな女性陣のしゃべり声が少しずつ近づいてくる。藤堂は声の方を一瞬見やって、僕の顔に視線を戻した。何かを察したらしく、小さく頷いた。

「心理学部生つてのは、モテるんだな」

藤堂は随分と茶化した口調で呟いた。彼に何か言おうと口を開いたが、その前に隣まで来た上坂さんが藤堂に声をかけた。

「そこ、空けてもらってもいい？」

藤堂は上坂さんらの方をチラッと見て、何も言わずに座席を立った。座面を手で払い、「どうぞ」と譲ると、隣の席に移動した。上坂さんは「どうも」と藤堂が座っていた席に腰を下ろした。その隣に青柳さん、僕の隣に鈴木さんが、ランチが乗ったプレートを持って座る。

「で、話つて？」

上坂さんは豊かな胸を強調するように、グツと上体を乗り出した。ちよつと湿

度が高めな空気に、フワッと甘い香りが混ざって鼻腔をくすぐる。僕は食事を脇によけ、手を拭いてからカバンを引き寄せた。その方から三冊、同じ雑誌を取り出した。

「武藤さんというか、森田さんから預かって」

僕は彼女らに、出来上がったばかりの同人誌、ヒイラギを差し出す。上坂さん、青柳さん、鈴木さん、三者三様に嬉しそうな表情を浮かべ、食事をよそにパラパラと中身を確かめている。

「藤堂も、いる？」

僕は自分用のカバンから取り出し、藤堂に差し出した。彼も彼女らのように受け取ってパラパラめくる。

「お前のが載ってる訳じゃないのか」

「サイトの運営は手伝ってるから、スタッフではあるんだけどね」

彼は「じゃあ、いいや」と返してくれた。

「で、この人たちは？」

「彼女らは全員、掲載されてる」

僕は藤堂に、作家先生の名前を順番に紹介していく。彼女らはみんなドヤ顔で藤堂に挨拶する。

「心理学部の女性作家か。お前、中々、えげつない付き合いしてんな」

「えげつないは、流石に言葉が悪いよ」

僕はチラッと女性たちの顔に視線をやったが、誰も大して怒っていないように見える。そういうところも含め、水面下でストレスを感じているところもはない。藤堂は、それを察してくれたのか。

「瑞希ちゃんとも付き合い合ってるのに、お前ばかりズルいよ、本当に」

「だって仕方ないでしょ。哲朗くんは、あなたと違って面白そうな男だし」

上坂さんは、突き放すように言った。藤堂は大して声を荒らげることなく、自然な口調で「つまらない男は、退散しますよ」と立ち上がった。

「皆さんでごゆっくりどうぞ」

「お心遣い、どうも」

藤堂はスツと食堂を出ていく。僕がその背中に「じゃあ、また」と声をかけると、彼は振り返らずに、手を挙げて去って行った。

初出 令和三年五月二〇日 ノベルアップ+にて公開

六月四日（日）

朝日が登ってから一度目が覚めて、なんとかトイレに行ってベッドへ戻ってきた、ような気がする。それから大分長い時間寝てた気がするけど、外はまだ明るいらしい。まだ少しクラクラする頭を支えながら、枕元のスマホに目をやった。時刻は午後二時。流星にちよつと寝すぎだろ、オレ。

ベッドの上でジッと座っているだけなのに、なんだか揺られている気がする。油断していると気持ち悪さが一気に頭を占領しそうだ。フラフラしながらもゆつくり立ち上がり、脱ぎ捨ててあったズボンを履き直した。ドアを開け、キッチンへ移る。

我が家の小さな食卓で、上坂さんはビールをお供に、先日渡した「ヒイラギ」に目を落としている。ようやく僕に気がついたらしく、雑誌を閉じて僕の方を見た。

「やっと起きたか」

「なんでキミがソコに？」

「なんで、とは失礼ね。留守番しててあげたのに」

「留守番？」

彼女はコップに水を入れ、僕に差し出しながら、「何にも覚えてないんだね」と言った。彼女によれば、僕はカギを開けたまま玄関で寝ていて、彼女の介抱によりベッドまで移動して、この時間になるまで寝ていたらしい。

家の鍵をかけて帰ろうにもどこにあるか分からなかったから、無人になるよりは、とここでビールを飲みながら雑誌を読んでいた、とか。

「それは、失礼しました」

僕は頭を下げようと思ったが、下を向いた瞬間に気持ち悪さが込み上げてきた。もう吐き出すものは残っていないらしく、一瞬口元に手を添えただけで、なんとか治った。

「二日酔いなのに、無理しないでいいから」

「二日酔い？」

そう言われれば昨日、というよりは日付が変わってからガンガン飲まされた

ような。午前様で部屋には帰り着いたけど、途中で力尽きたのか。上坂さんは水を飲むように促した。

「とにかく、水を飲んで出す。あとは寝てたら何とかなるから」

「ありがとう」

彼女に誘導されるまま、水を飲み、起きがけのトイレを改めて済ませる。ちょっとずつ楽になつてきた気はするけど、まだ長時間椅子に座るのは厳しいようだ。

「起きたんなら、帰ろうかな」

彼女は自分の鞆に、「ヒイラギ」を仕舞った。

「何か用事があつたんじゃないの？」

「二日酔いの人と、何かする気は起こらないな。今日のところは、出直すわ」

彼女はふう、と一息ついて立ち上がる。僕がそれをボーツと見ていると、彼女は振り返つて身を寄せてきた。

「それとも、私にされるがままになる？」

彼女は僕の胸に手を置いて、さらに近寄る。二日酔いのドキドキか、別の理由で鼓動が早いのか、頭の処理が追いつかない。

「なくんて、冗談冗談。ラムネとウコンの力は置いていくから、お好きにどうぞ」

彼女はカバンから、懐かしい青緑のボトルを取り出すと、食卓に置いた。ウコンドリンクは冷蔵庫にあるらしい。彼女は自分が飲んでいた缶ビールを飲み切ると、空き缶を片付けた。

「そうそう、ゴムとか雑誌とか、もうちょっと上手に隠してね」

彼女は僕に振り返つてそれだけ言うと、カバンを持って出て行った。彼女の残して行ったラムネを素直に口にするか引つ掛かったけど、ブドウ糖の塊を口に放り込み、冷蔵庫のウコンドリンクをグツと一気に飲み干した。プラセボだろうけど、ちょっと気が楽になつてきたけど、今度は違うところで気が重くなつてくる。とりあえず、玄関の鍵を内側から掛けた。

初出 令和三年五月二〇日 ノベルアップ+にて公開

六月一五日（木）

ショッピングモールの出入口に近いコメダから出て、比較的賑やかなフードコートの前を右に曲がる。サーティーワンの甘い匂い、隣のジューススタンドの匂いもちよつと心魅かれる。さつきまでコメダでシロノワールと向き合ってたんだから、別腹も何もなさそうなんだけど。

スタバの手前にある久世福商店でも、「父の日フェア」と題して、お酒やツマミが並べられている。前を歩いていた浪川さんは歩みを止め、並べられているお酒を手を取った。

「父の日って、なあ〜んか節操ないよなあ」

「そうですか？ 母の日も、バレンタインも、割とそんな感じですけど」

イオンモールの中は、どこもかしこも「父の日」にかこつけて、食品から嗜好品からファッション雑貨、家具から家電まで売り付けようとしている。母の日もバレンタインもそれぞれ、「コレ」というコアはあるものの、節操のなさは大して変わらないような気がする。

「でも、母の日はカーネーション、バレンタインはチョコって一応あるだろ？」

父の日にネクタイとかお酒はまだ分かる気もするけど、甚平とか帽子とか、ただのシーズン先取り展開だろ？」

いつの間にか、当たり前のようにディスプレイされていて違和感を微塵も感じないが、そう言われればそんな気もする。とは言え、六月の中旬を過ぎて夏を先取り、つていうのもファッション的には売れ残りな気もする。

浪川さんは独りで色々眺め、商品を戻して前に進んだ。今度は左手のリカーシヨップの前で立ち止まる。

「父の日、なんかやるんですか？」

彼は店頭のディスプレイを眺めながら、「いいや、何にも」と言った。

「オレがやらなくても、瑞希か晃がやるさ」彼は僕の方を見て、「どうせ、君もやらないんだろう？」と言う。僕は返す言葉が思い付かず、言葉に詰まった。

「オレはただ、面白そうな酒が安かったら買おうと思つて、見てるだけ」

浪川さんは立ったり座ったりしながら、店頭に並べられたお酒やおつまみを一

つずつ入念に確かめていく。出先のお昼休憩とはいえ、のんびりアレコレ見過ぎではないかと心配になるぐらい、お店の中まで入って行って、隅々まで眺め倒している。

僕は腕時計に目を落とした。そろそろ戻らないと、午後の仕事が始まってしまおう。クラフトビールを見ていた浪川さんに声をかけた。

「おお、すまん、すまん」

彼はビールをいくつかピックアップして、レジに向かう。パパッと会計を済ませ、袋に詰めてもらってお店を出る。リカーショップの先にある出口から屋外駐車場に出て、彼が止めた車のところまで戻った。

先日乗ったのとは違う社用車の助手席に乗り込んだ。浪川さんはシートベルトを閉め、ルームミラーを確かめる。さっき買った荷物は、いつの間にか後部座席に置いてあった。

「大学じゃなくて、Eサイズさんのオフィス下でいいんだっけ？」

僕が頷くと、彼は「了解」と車を発進させる。今から千里中央へ戻る彼にとつては逆方向に送ってもらう。あつという間に着くはずだ。寝てしまわないよう、グツと力強く拳を握りしめた。

初出 令和三年六月二四日 ノベルアップ+にて公開

七月四日（火）

ここ二週間ぐらい空梅雨気味だった反動か、猛烈な雨が降り続けている。阪急は動いているようだが、元はダメらしい。凄まじい雨の中、オフィスから駅へ向かって振替輸送で満員に近いらしい。

幸い、河川の氾濫に至るほどの雨量ではなさそうだけれども、山間の方では高齢者等避難の防災情報が届いていた。雨雲レーダーを見ても、もうしばらく雨は強いままのようだ。

「暗がりの共同トイレは、流石にちよつと怖いね」

オフィスのドアを開け、セリフとは裏腹に堂々とした足取りで上坂さんが中に入ってきた。さつきまでペンを動かしていた応接スペースに戻った。原稿用紙の上を走る、少し硬そうなペン先の音が聞こえてくる。

「帰らなくていいの？」

彼女はペンを止めずに、「風邪を引く覚悟で、濡れ鼠になれって？」と言った。「阪急で帰ったって、そこから先の足がないの」

彼女はスマホの画面を僕に見せる。お父さんとのLINEは、「迎えに行けない。頑張れ」で途切れていた。

「お父さんに車出してもらうより、ココで一夜を明かす方が安全ってこと」

夏場とはいえ、もうそろそろ午後八時。強い雨が加わるとなれば、女子大生が一人で出歩くより、ココに籠る方が確かに理に適っている。

「僕が居てもってこと？」

「そこは、何も言っていないけど」

上坂さんは口元に笑みを浮かべ、僕の肩に触れる。僕は入り口のやや上を見ながら、「一応、監視カメラはあるから」と言った。彼女は「死角の一つぐらいあるでしょ？」と色っぽくささやくと、インクの匂いを漂わせて元の席に戻っている。

「そんなことより、お腹空かない？」

彼女は原稿をトントンと揃えながら、僕の方を見て言った。僕もそろそろ晩ご飯にしたかったけど、何かあったつけ。オフィスを出れば、通りの向かいにコン

ビニぐらいはあるけど、ビルを出て戻ってくる間にずぶ濡れになりそうだ。

冷蔵庫には社長が置いている酒類とソフトドリンク、従業員が好き勝手に入れているお菓子、お酒のお供ぐらいいは入っているけど、お腹を満たすには少々物足りない。オフィスグリコに手をつけるのも、まだ早い。

自分の引き出しにしまっている秘蔵の食糧に手をつけても構わないが、彼女の分も負担するのは気が進まない。ドリップコーヒーのパックをしまっている棚に、従業員用の非常食もあったはず。扉に手をかけ、中を覗いてみる。

「カップ麺とインスタントの味噌汁とパックのご飯、おつまみ用っぽい缶詰もあるけど、こんなんでいい？」

僕は、上坂さんが開けてくれたスペースに種類ずつ並べていく。彼女はそれを見て小さく溜め息をつき、「キッチンはないんだもんね」と言った。「じゃあ、仕方ないか」とカップヌードル醤油味を掴むと、パパッと開封作業に取り掛かる。

「ん？ 醤油がよかった？」

彼女は手を止め、僕の方を見る。僕は「いや、まだあるから大丈夫」と言いながら視線を逸らし、非常食を元通りに仕舞っていく。代わりに割り箸やら使い捨てカップやらを準備しながら、横目で上坂さんの動きを見つめてしまう。

ありそうでなかったシチュエーションに、正体不明の魅力を感じている。不思議な気持ちに戸惑いながら、気を逸らす方法を探し始めた。

初出 令和三年六月三〇日 ノベルアップ+にて公開

七月二十九日（土）

大量の写真が表示されているモニターを睨んでいると、向こうの方から野村さんが恐る恐るといった様子で近づいてきた。腕組みを解いて、眉間を緩めながらそちらへ顔を向ける。野村さんは手元のフラッシュメモリを差し出ししながら、「今日の動画、チェックしてもらってもいいですか？」と言った。

僕は「ありがとうございます」と言いながら、それを受け取った。今日の日付でリネームされている動画ファイルを開く。最近、例の映画プロジェクトが動き始めたため、週末のダンス練習には同席できていない。

二現場体制は沙綾さんも同じだろうに、疲れを感じさせない動きに思える。後ろの方でちよこちよこ動いているみいちゃんも、最初の頃に比べれば、かなり動きにキレが出てきたような気がする。

「うん、コレでいいんじゃないですか？」

僕の言葉に、隣で縮こまっていた野村さんの表情が緩んだ。野村さんの映像編集もどんどん上手くなっている。Zサイズから直接依頼する案件はないだろうけど、この動画に関してはコレで十分だ。

「次から、ノーチェックで大丈夫ですよ。直接アップロードできるように、ログイン情報共有しておきますね」

野村さんの視線が、壁の時計に向いた。もうそろそろ、一七時半。

「今日の分は、僕の方で上げとくんで」

野村さんは「ありがとうございます」と頭を下げると、さつきまで座っていた席へ戻り、帰り支度を始めた。僕はそれを視界の隅に留めながら、受け取った動画ファイルのアップロードに取り掛かる。

入り口のドアが開くと、いつもよりラフな格好の武藤さんが顔を出した。野村さんは後ろを振り返り、少々緊張した面持ちで「お疲れ様です」と会釈した。武藤さんは「お疲れさん」と返し、「野村さん、今帰り？」と付け足した。野村さんは頷いて、早々に「お先に失礼します」と、僕にも頭を下げたオフィスを出ていく。

武藤さんは「ほいほい」と軽い調子で彼女を見送ると、自分のコーヒーを入

れて、僕の方を見ながらカップを啜った。

「君も、いつまで仕事してるつもりだ？」

僕はアップロードの進行度合いを見ながら、「写真の選定が済んだら、引き上げますよ」と答えた。武藤さんは人差し指を立てて、左右に振る。

「期日は大事だけど、休むのも仕事だ。また、無茶してるんだって？」

「無茶なんてしてませんよ。今やりたいことを、できる体力があるうちにやってみるだけなんで」

学問も、仕事も、半分遊びのような取り組みも。どれも手を抜かないで成し遂げたい。武藤さんは肯定も否定もせず、「でも、今日と明日はしっかりと休みなさい」と言った。

「出来れば、ふらつと『いばフェス』に顔を出して、適当に飲み食いして、適当に写真とか撮って、SNSにアップロードしてもらえると、非常にありがたい」

武藤さんは笑顔を浮かべながら、「非常に」に力を入れて言った。

「分かりましたよ。じゃあ、動画のアップロードをしてるんで、電源は落とさなさい」

僕は充電していた自分のスマホをポケットに入れ、カバンから財布を取り出した。武藤さんは、「承知した」と笑顔で応えた。彼の「いつてらっしゃい」を背中に受けながら、Zサイズのオフィスを後にした。

初出 令和三年九月九日 ノベルアップ+にて公開

八月一四日(月)

藤堂のツテで入手した、過去二年分のノートと、去年の講義を記録した動画。一昨年の分はオンラインでアーカイブが残っていたから、それとノート、教科書とを照らし合わせれば、概ね理解できたように思う。

ノートも講義もデータで残しておいてくれた藤堂の知人、結果的にビデオ・オンデマンドとなっていた一昨年の授業方針に感謝だな。上坂さんたちにお願いしても、あの人たちのことだから耳を揃えてデータを提供してくれただろうけど、藤堂のおかげで下手に借りを作らずに済んだのもありがたい。なんだかんだで、持つべきものは友だな。

今度、食堂で会ったら一食分ぐらい奢らないと……。

中身が頭に入った「つもり」で終わっても仕方がない。グループワークや実習は仕方ないとして、座学はテストもやつておきたい。カバンの中には、先生に頼み込んで入手した「当時のテスト」と、模範解答も入っている。今から広げて手をつけてもいいんだけど、小腹が空いてきたような気もする。モニターの右上へ目をやると、そろそろ一一時半。

周囲を見渡すと、電源が取れる窓際の席も半分ぐらいが埋まり、他の席も八割ぐらい埋まりかけていた。背後の大きなテーブル席も、互い違いにほぼ埋まっている。

一旦切り上げて、あとは家でやろうか。隣のマクドナルドで食べて帰ってもいい。

僕はイヤホンを両耳から外し、ノートパソコンを閉じてカバンに入れた。藤堂の知人から借りた教科書も汚れや折り目がかかないよう、丁寧に仕舞う。動画を見ながらメモを取っていた筆記具もザッと筆入れに入れ、そのまま隙間にねじ込んだ。

氷が溶けて、底に残っていたガムシロと混ざった液体を飲み干し、空のプラカップを片手に、カバンを背負って椅子から腰を上げた。フタとストローを分け、カップも分別する。手を洗いたいけど、どうせならトイレを済ませてから出ようか。

運良くトイレは空いていて、サッと用を足して手を洗った。トイレを済ませて外へ出ようとしたところで、見覚えのある横顔が目の前を通り過ぎた。その背中を追いかける形で外に出る。

「陽菜ちゃん、だよな？」

僕が目の前の中身に声をかけると、女性は足を止めて振り返った。髪型や目元の雰囲気は大人っぽく見えるけど、目の形や輪郭はお父さんによく似ている。彼女は「どうも」と会釈すると、そのまま駐輪場から自転車を出した。

僕が自転車を出すのを気にかけることなく、そのままマクドナルドの方へ自転車を押していく。僕はそれを足早に追いかけた。彼女の自転車に並べる形で、自転車を停めた。陽菜ちゃんは、「何故、ずっと着いてくるのか」とやや鬱陶しそうな目で僕を眺めていた。

「今からお昼？ 奢るよ」

表情が若干濁る。ちっちゃい頃はもっと素直な子だった気がするけど、高校生ともなるとそんなもんか。美桜とはまた一味違うややこしさだな。

「一緒に食べなくていいからさ。俺も、勉強したいし」

僕は自分のカバンに手を添えた。彼女も大きなカバンを下げている。陽菜ちゃんはツンとしたまま、店の中へ入っていく。僕がボサツとしていると、彼女はドアに手をかけたまま、「早く、早く」と僕に手招きをした。

初出 令和三年九月二四日 ノベルアップ+にて公開

九月一三日（水）

仕事の気分転換に、必要な道具をカバンに入れて外に出る。自宅からキャンパスまでの軽いウォーキングも、頭の刺激になってちょうど良い。

大学はまだ、夏休みの真っ只中。八月末までは見かけた小学生もいなくなり、学食も含めた校舎の中も、人影は少ない。こっちのキャンパスで部活に励んでいる人たち、卒業論文等で研究室に詰めている人たちと教職員、もしくは就活生のいずれかだろう。

それにしても、まだまだ午前中。学食も、そのスタバも、人はほとんどいない。

電源が取りやすそうな端っこの席を探し、荷物を置いて先に座席を確保してから缶コーヒーを買った。こういうものがなくても、誰にも文句なんて言われないだろうけど、あんまりぼんやりしすぎた時の眠気覚ましに、横へ置いておこう。

とりあえず、缶コーヒー以外はテーブルの上に出さず、カバンを横に置いて椅子に身体を預ける。何を見るときもなく、食堂全体を眺めるように視線をやった。ただただぼーっと、物の輪郭を捉えるのもやめて、ぼんやりとした視界で頭を空っぽにする。

耳に入れたノイズキャンセルもついたワイヤレスイヤホンからは、どこかの海の波の音が聞こえてくる。立体的な奥行きを感じさせてくれる心地よい揺らぎに、身も心も委ねてみる。十分に睡眠もとっているはずなのに、だんだん目蓋が重くなってきた。

このまま船を漕いで、睡魔に襲われるのも良いかもしれない。急ぎの仕事は終わらせてある。アポイントや準備も、今日はやらなくていい。程々の上がりを出せば十分だし、夕方ぐらいまで開店休業状態でも大丈夫。

「ねえ」

急に大声で話しかけられて、眠気が一気に吹き飛んだ。驚きのあまり、椅子から転げ落ちそうになる。左耳のイヤホンが僕の身代わりに耳から落ちたのは、たまたまだろう。僕に声をかけて来た人物は、自分の耳に髪をかけながら、転がり落ちたイヤホンを拾い上げた。

「驚かせちゃって、ごめんなさい」

彼女、上坂さんはにこやかにイヤホンを差し出した。僕は恐る恐る、「拾ってくれてありがとう」と、それを受け取った。上坂さんは流れるように、僕の向かいの席に座った。

「まだ授業もないのに、どうしたの？」

僕は右のイヤホンも取り出して、二つともカバンにしまった。僕と同様に、就活にも教職にも縁がないはずの彼女が、今日みたいな日にわざわざ茨木キャンパスまで出向く理由が思いつかない。

「もしかして、僕が何か忘れてる？」

「梅田で映画デートの約束してたって言ったら、信じる？」

彼女の問いかけに、僕はゆっくり首を振る。少なくとも、仕事関係のアポイントでやらかした、とかではなさそうだ。

「明子さんの誕生日の件で聞きたいことがあって」

「それで、わざわざ？」

「DMだとスルーするでしょ？」

公開のチャンネルでも聞けないことを、わざわざ聞きに来たらしい。それにしても、よくここにいると分かったもんだ。僕の疑問をよそに、彼女は自分のスマホを取り出して、写真を探しているようだった。

「去年の様子だと、若いお客さんは一人もいなくて、結構ラフなパーティみたいじゃない？ でも、この間の一朗さんのパーティだとカッチリだから」

彼女は、どこで入手したのか分からない二枚の写真を僕に見せつける。

「どっちのつもりがいいのかな、と思って」

「ど、どっちって？」

「だから、カジュアルで良いのか、フォーマルが良いのかってこと」

「どうやら、「うちのパーティ」と母の好みなんかを聞きたいらしい。それを聞いてどうしたいのか、その辺りは聞かない方が良さそうだ。さっきまで休ませていた目と頭をフル回転させて、模範解答を捻り出さねば……。」

初出 令和三年一〇月二三日 ノベルアップ+にて公開

九月二一日(木)

スマホのアラームも時計の目覚ましもセットせずに寝ていたのに、枕元で唐突に唸り始めたスマホのバイブに起こされた。すぐに鳴り止むと思っていたのに、延々と終わらない。重たいまぶたをうつすら開け、画面を手元に引き寄せると電話が鳴り続けているようだった。

時刻は午前十時、電話の相手は上坂さんと出ている。彼女なら、僕が出るまで延々と呼び出し続けるだろう。まだゆっくり惰眠を貪りたかったが、身体を起こして緑のボタンを押した。

「もしもし？」

「あ、起きた？」

自分のガサガサ声に驚いて、唾を飲み込んだ。辺りを見回すと、寝る前に買った無糖の炭酸水が残っていた。キャップをひねると、微かにガスが抜ける。

「昨日のメッセージにいつまでも既読がつかないから、モーニングコールしてみただけど」

十時にモーニングコールして、と言いかけた言葉を炭酸水と共に飲み込んだ。「散々引つ張り回した上に、無理やり飲ませちゃったし、大丈夫か気になっちゃって」

そういう風に振り回した自覚はあるんだ。昨日は僕も雰囲気とお酒に飲まれて、無邪気を素直に信じてしまった。自分もそれなりに飲んだはずなのに、アレだけやっても、一緒にいた相手を気遣う余裕があるんだと見せつけられて、電話口の向こうではさぞかし勝ち誇った顔をしているんだろう。

「じゃあ、来週の件と今日の夕方、よろしくね」

彼女は自分の要件だけを伝えると、一方的に電話を切った。ほとんど休日の今日のスケジュールで唯一の予定が、夕方のミーティング。それまでには、人前に出られるように準備をしなければいけない。

とりあえず、スマホに充電ケーブルを挿し直す。ついでにメッセージを立ち上げると、確かに日付が変わるギリギリの時間帯に、上坂さんから「無事についたよ。おやすみ」のメッセージがスタンプと共に届いていた。

あと二、三口で飲み切りそうな、気の抜けた温い炭酸水を片手にキッチンの方へ行く。とりあえず電気ケトルでお湯を沸かすようにセットして、朝食のパンを冷凍庫から出す。

「そうだ、帰りに買おうと思ってたんだ」

昨日は早めに仕事を切り上げて、帰りに食パンを買おうと思っていたのに、上坂さんの用事に付き合わされて、買いそびれたんだ。帰りにコンビニへ寄った時は、たまたまプライベートブランドの六枚切りが切れてたんだ。

ここで余計な出費は痛いけど、仕方ないからパン屋へ寄ろう。僕はあんまり行ったことのない、駅前から北へ行ったところに、ハード系のパンが美味しいパン屋があると、母に教えてもらったことがある。

先にシャワーを浴びて、洗濯機を回そう。今から干すにはちよつと遅い気もするけど、今日中に手をつけておかないと、着るものもタオルもなくなってしまう。炭酸水を飲み切って、ペットボトルのラベルと蓋を分ける。一旦元の部屋に戻って、カーテンを開けた。窓の外はとても明るく、街は元気に活動し始めている。僕は、替えのパンツとタオルを取り出した。

初出 令和三年一〇月一五日 ノベルアップ+にて公開

一〇月五日（木）

自転車を押しながら、香織さんと沢良木辺りの大通り沿いを歩いている。十月に入り、陽が落ちるのも段々早くなっているらしく、目の前はすっかり夕景っぽい色が広がっていた。

「なんか、ゴメンね。荷物持ちしてもらったのに、啓とも遊んでもらっちゃって」

香織さんは僕の少し前を歩き、後ろを振り返りながら言った。彼女の案内で、最寄りのコンビニまでやってきた。最寄りとは言いながら、さっきまで遊んでいた公園からはそれなりに歩かされた気がする。とはいえ、そんなことを香織さんに訴えたところで、彼女はさっきと同じ調子で「ゴメンね」と言うだけだろう。

僕は自転車を駐輪スペースに止め、鍵をかけて香織さんと共に店内へ入った。まだ微かに熱を持っている身体に、程よい冷房が心地いい。

香織さんはスタスタと脇目も振らず、ドリンクコーナーへ歩いていく。僕も慌ててそれに付いていく。

「どれにする？」

普段はあまり来ないローソンの品揃えに目移りしていると、香織さんは「こっちの方が良かった？」と隣接しているお酒のコーナーを指さした。

僕は「いや、こっちでいいですよ」と、いつもとは違うメーカーの無糖の炭酸水を選んだ。期間限定のフレーバーでもなく、特保のものでもない、スタンダードな奴。ペットボトルを手に取ると、香織さんは「全然、冒險しないんだ」と僕から商品を受け取った。

「他にも何かいる？」

彼女がいう「何か」とは、お菓子やホットスナックの類を言っているのだろう。小腹が空いた気もするが、それはそれで、じっくり時間をかけて選びたい。僕は「いや、それだけで」と答えると、「本当に君はつままないなあ」と笑いながら、レジへ向かった。

僕が香織さんの後ろに並ぼうとすると、彼女は手を振って「先に出てて」と言った。僕はそれに素直に従い、先に大通りへ面している外へ出る。大きなトラッ

クがたくさん止まっている駐車場を眺めながら、香織さんが出てくるのをジッと待った。

「お待たせ」

香織さんは袋ももらわず、シールを貼っただけのペットボトルを僕に差し出した。僕は「ありがとうございます」と受け取り、早速開けて一口飲んだ。喉の渇きが若干マシになる。

「で、お母さんの感触はどうだったの？」

香織さんは僕の隣で腕を組んで立っている。僕は炭酸水をもう一口飲む。

「上坂さんは、お眼鏡に適ったのかって聞いてんの」

香織さんに言われるまで忘れていたけど、上坂さんと母とのファーストコンタクトはちょうど先週の出来事だった。武藤さんは同じ会場にいたけど、香織さんにその辺の話までは伝わっていないのか。

「どうなんですかね。僕にはよく分かりません」

当日、ずーつと上坂さんと共に居た訳ではないし、母が出席者とどんな話をしていたのかも、全然見ていなかった。直接自分で引き合わせ、紹介したような気はするけど、あれは結局、武藤さんにやってもらったわけ？

その時の細かい反応も、あんまり覚えていない。先週の話だというのにほぼ記憶に残っていないということは、大したハプニングもなかったのだろう。

「じゃあ、今のところはやっぱり瑞希さんだ」

「な、何が？」

「もー、分かってんでしょ」

香織さんは強めに僕の背中を叩いた。僕は炭酸水を吹かないように口を閉じ、ペットボトルから零さないように身体を動かした。香織さんは一人楽しそうに笑うと、「じゃあ、今日はありがとね」と言い残し、僕に背中を向けて歩いて行った。

初出 令和三年一〇月二〇日 ノベルアップ+にて公開

一月二日（木）

テーブルの上で綺麗に割り勘して、最後は僕がレジで支払った。僕らを招集した主催者は、晃くんを支えられてようやく立っている。レシートを受け取り、一歩外に出ると夜風がとても心地いい。

一足先に出ていた上坂さんは、ちよつぴり寒そうに道の端で両手を擦り合わせていた。僕は後ろから来た二人にせつつかれ、出入り口の前を開ける。

「おう、悪いね」

藤堂に肩を貸して支えている晃くんは、僕に軽く謝った。僕は「いいって。気にしないで」と言った。男どものやりとりを、上坂さんは少し離れたところで冷ややかな目で見つめている。

「で、上坂さんは阪急だっけ？」

彼女は声を出さず、頷いて答えた。特に急ぐ様子もないが、さつきと帰路にきたように見える。それを見ていた晃くんは、「お前もあっちだったよな？」と僕に確かめてきた。僕が頷くと、「じゃあ、駅まで送ってやって」と言った。

「こいつの事は心配すんな」

僕が、彼に支えられながらグロッキーになっている藤堂を見てるとバレてしまった。彼は藤堂の方をチラッと見て、崩れかかっていた体勢を一度立て直す。

「本当に一人で大丈夫？」

とつきに手を出しかけるものの、晃くんは「大丈夫、大丈夫」とやんわり断った。

「こいつの介抱は慣れてるから、こっちは任せてさつきと行きな」

晃くんを支えられながら、藤堂は情けない声で「原田く」と僕の名前を呼んでいる。それに後ろ髪を引かれるが、晃くんは追い払うように手を振り、「さつきと行け」とアゴのジェスチャーまで付け加えた。

「じゃあ、また」

僕が晃くんに別れの挨拶をする前に、上坂さんは阪急の方へ向けて歩き始めていた。

「おう、じゃあな。先生も、よろしく頼むよ」

晃くんは、どんどん遠ざかっていく「先生」にも声をかけた。僕は置いていかれないように、足早に先生の後を追いかける。自転車や他の歩行者にも気をつけながら、先生の横まで歩いた。

「あの人よりは、あなたの方が適任ね」

風を切つて颯爽と歩く速度に歩調を合わせていると、先生は僕の方をチラッと見て呟いた。僕が「えっ？」と聞き直すと、彼女は「何でもない」と応えた。

「中々有能なお兄さんじゃない」

彼女は再び前を向いたまま言った。どうやら、晃くんのことを言っているらしい。

「才能豊かなお兄さんに、実直で人を見る目があるお兄さん、か。羨ましいわ」

「あれ、上坂さん、ご兄弟は？」

「生意気な妹が二人」

生意気な妹、か。自分にも思い当たる節はあるけど、上坂さんに三姉妹の長女つぼさもあまりないような。彼女は尚もズンズン歩きながら、僕の顔を見上げて「長女つぼくないって思ったでしょ」と突っ込んだ。僕が「いや、そんな」と否定しかけると、即座に「ウソついたって、顔に書いてある」と言った。

市役所の南側、消防署の前で信号に捕まって立ち止まる。曲がってくる自動車に気をつけながら、横断歩道を渡り切った。向きを変え、歩行者用信号が切り替わるまでの短い時間が、永遠のようにも感じられる。

隣で深刻に考えている僕のことなど微塵も気にしていない様子で、上坂さんはキリッとした表情を微塵も崩さず、目の前の信号が変わった瞬間に歩き始めた。僕は一瞬遅れて、それに続く。

時折外灯に照らされながら、堂々と闊歩する姿は中々画になる。黙っていれば横顔もキレイなんだけど……。前を見つめていた横目が、チラッと僕を見て笑顔に変わった。

初出 令和三年一〇月二八日 ノベルアップ+にて公開

一月二八日（火）

「彼女ができてから、初めてのクリスマスだな」

武藤さんは、やけに楽しそうに言った。嫌味すら感じるそのニヤニヤ顔に、初めて軽いイラ立ちを覚える。この人にイラつく日がやってくるなんて、こつちで一人暮らしを始めた頃には想像もつかなかった。それだけ、濃い関係が出来ているということだろうか。

こつそり息を吐いて、イライラも外に吐き出す。気持ちを整えて言葉も探している間に、目の前にいた一輝さんが口を開いた。

「イルミネーションとか、見に行ったりしないの？」

「それが、この間一人で行かせちゃってんだよ」

「えー、マジですか？」

僕のリアクションを待たずに、武藤さんと一輝さんの間で盛り上がっている。そつちがそのつもりなら、僕は何も言うまい。黙ってビールを傾け、段々慣れてきた強い苦味にささくれ立った心をなだめてもらう。

「そう言う一輝くんは、どうすんの？ 並のクリスマスじゃ、あの娘は満足しないですよ」

「そうなんですよね。でも、ギリギリまで仕事じゃないですか」

「確かに、今年のカレンダーはなかなか意地悪だよな」

来月のスケジュールまでハッキリと把握してなかったけど、彼らがそんな風に見えるようになってくる。スマホを取り出して、「12月のカレンダーを確かめる。最後の二週間が大変なことになっていた。」

「二四日が日曜日っていうのも、ね」

一輝さんが武藤さんに同意を求めると、彼は大きく首を縦に振り、「そうなんだよ」と強い同意を示した。

「幸い、うちは中学生と高校生だからいいけどさ、香織のところとか大変だろうな」

「今度は一輝さんが小刻みに何度も頷いて、「あゝ、確かに」と呟いた。」

「クリスマス会を別途やるらしいけど、それはそれとしてって感じだろ？」

武藤さんは「なあ？」と今度は僕に同意を求めてきた。僕は曖昧に笑いながら、ビールに口をつけた。それを見ていた一輝さんは、残りが少なくなっていた武藤さんのグラスを指して、「次、何にします？」と訊ねた。

武藤さんはカウンター横のメニューボードをその場から見て、「うくん、同じのかな」と言った。僕の顔を見て、「お前は？」と言う。

「僕は、まだいいです」

「じゃあ、それで」

武藤さんが一輝さんにそう伝えると、彼は「了解です」と財布を持ってカウンターへ行こうとした。武藤さんは彼を呼び止めて、自分のカードを彼に渡す。二人の間でどっちが出すのかしばらくやりあつた後、一輝さんが折れて武藤さんのカードで二人の代金を支払っていた。

「で、義理の兄貴としてどうよ」

カウンターの前で新しいビールが注がれるのを待っている一輝さんの背中を見ながら、武藤さんが僕に言った。

「仲良くやれそうなのか、そうじゃないのか、どっちか訊いてるんだよ」

「義理の兄貴云々は分かりませんが、ギスギスはないですね」

僕も一輝さんの方をジッと見ていると、グラスを二つ受け取ってこっちに振り返った彼と、視線がかち合った。向こうは少々不思議そうな顔でこっちを見ている。僕は少々慌てて、「何でもないです」と言った。

「そう言えば、来年も福男走るんだって？」

一輝さんからグラスを受け取りながら、武藤さんが言うと、一輝さんは「今のところは、そういうことになってますね」と苦笑いを浮かべながら答えた。

「お前も行く？」

武藤さんは陽気に笑いながら僕に言った。急なパスに僕は驚いて一輝さんの方を見る。彼も一瞬驚いた様子だったが、「一緒にいてくれると助かるな」と僕に笑いかけた。僕が答えに悩んでいると、武藤さんは一人楽しそうに「冗談だよ、冗談」と笑っていた。

初出 令和三年一月八日 ノベルアップ+にて公開

一二月二六日(火)

三人分の食器と、カレーが入っていた鍋をシンクで洗っている。みいちゃんが後ろで、残りのご飯を炊飯器からラップに移して小分けにしてくれていた。もう一人の客人は、向こうの僕の部屋に籠もって、漫画でも漁っているのだろう。缶ビールを持ってドアの向こうへ姿を消してから、中々戻って来ない。

シンクの中を片付けると、後ろから炊飯器の内釜が放り込まれた。僕はそれも洗って、横の水切りカゴに伏せた。食卓には、一食分ずつタッパーに取り分けた残りのカレーと、同じサイズのご飯が綺麗に並んでいる。

「もうちよつと冷ましてから、冷凍庫に入れてね」

「冷蔵庫じゃなくて？」

みいちゃんは頷いた。タッパーの蓋に手を添えると、確かにまだ熱い。ラップに包んだご飯の方は、もつと熱そうだ。

「食べるときは、しつかり中まで温めてね。焦げ付きやすいから、しつかり混ぜること」

僕が軽い調子で「りょうかい」と答えると、みいちゃんは真剣な面持ちで

「本当に分かってる？」と言った。

「ウエルシユ菌、怖いんだから」

「ウエルシユ菌？ 彼女が口にした用語がいまいち分からず、首を傾げてしまった。後で検索してみよう。」

みいちゃんは食卓で、自分が飲んでいた缶ビールを口元に運んだ。どうやらもう、空っぽらしい。僕の分は食べている最中になくなってしまった。冷蔵庫を空けてもストックは見当たらない。

「お茶かコーヒーか、どっちがいい？」

僕がみいちゃんに訊ねると、奥の部屋から缶ビールと漫画を手にした上坂さんが、「私は紅茶かな」と言いながら出てきた。彼女は僕らの視線など微塵も気にすることなく、漫画を食卓に置き、缶をシンクの中に持って行った。

「濯いで漬した方がいい？」

僕は彼女に、「そのままでもいいよ」と答えた。彼女は「そう？ じゃあ、お言

葉に甘えて」とみいちゃんの隣の席に腰を下ろし、足を組んで漫画を読み始めた。僕はとりあえず、電気ケトルに水を入れて沸騰させるようにセットした。ストッカーの中を覗き込み、何が入っていたか確かめる。

「イエローラベルとドリップコーヒーはあるけど、どっちにする？」

「じゃあ、私も紅茶で」

「かしこまりました」

僕は小さなティーポットと、百均で買った無地のマグカップを用意した。ピラミッド型のティーバッグを二つほど入れ、お湯が沸くのを待つ。

みいちゃんは隣の上坂さんを横目で気にかけてながら、僕に向かって話題を切り出した。

「年末年始って、どうするの？」

「年明けたら挨拶に帰るぐらいかな」

ここで年明けを迎えても何にもやることのないのはよく分かっているけど、実家に帰って寝泊りするよりは、まだマシだと思っている。武藤さんに誘われて、そっちへ行く可能性も十分にある。

みいちゃんは「ふーん」と、頷いた。何かを考えているように見える。

「何、どうしたの？」

「お父さんの誕生日が、三〇日でき。今年はお誕生日会しようか、ってなってる」

みいちゃんはおずおずと言葉を紡いだ。横で漫画を読んでいたはずの上坂さんは、いつの間にか顔を上げて、「流石にそれは、遠慮しようかな」と言った。僕は内心、「そりゃ、そうだろう」とツツコミながら、みいちゃんがそれを切り出した理由を考えた。

「僕が出席しても、大丈夫？」

「というか、出席してもらえるとありがたいんだけど」

イヤなものを見るような目で上坂さんを一瞥しながら、みいちゃんは口をモゴモゴさせながら言う。何かしら、話にくい事情があるらしい。大体の予想を脳裏に描きながら、沸いたばかりのお湯をポットに注いだ。

二月三十一日(日) 午後九時

「R茨木にバスが到着した。どうやって帰るか散々悩んだ結果、朝と同じルートで帰ってきた。朝と違うのは、目の前の階段でデッキに上がり、改札まで行ったところでみいちゃんと離れること。」

僕は大きな紙袋を抱えて、先に行くみいちゃんの背中を追いかける。みいちゃんは上まで行って立ち止まり、後ろを振り返った。

「一つぐらい持とうか？」

「全然気にしないで。大丈夫、大丈夫」

僕は両手の袋を高く持ち上げて、彼女に「へっちゃらだ」とアピールした。大ききや形から来る独特の持ちにくさはあるものの、重さはそれほどでもない。みいちゃんは僕が隣まで来るのを待ってから、駅の方へ歩き始めた。

「本当に、駅まで大丈夫？」

僕が心配のあまりそう訊くと、彼女はケロつと「大丈夫、大丈夫」とさっきの僕を真似して言った。

「駅からはすぐだし、あなたが無駄に往復する必要ないし」

彼女はさっきも、「バスの方が安上がりでしょ」と一輝さんたちを駅で見送りながら、この帰り道を選択した。

「それに、家まで見送ってもらったら、そのままウチで待つてもらうことになるけど、それは辛いでしょ？」

彼女は笑いながら言った。彼女のご両親に特別嫌われているとは思わないが、特有の緊張感は捨て切れない。お義父さんから熱い歓迎をされるのも、それはそれで辛い。彼女の誕生日にしこたま飲まされたのを、まだ鮮明に覚えている。

「そっちはそっちで準備があるだろうし、今はここで解散しよう」

駅の構内に入ると、彼女は僕の手の中から一番小さな紙袋を取り、改札へ向かった。もう少し引き止めたい僕の気持ちを振り切るように、「あとの荷物はよろしく」と言い残して改札を通って行った。次の電車が入ってきたらしく、あつという間にホームの方へ姿を消した。

僕は大きな荷物を持たされたまま、彼女が消えた方向を見つめていた。すぐに

降りてきたお客さんで改札の前がいつぱいになる。僕は邪魔にならないよう、大きな荷物を持ったまま東口から駅を出た。みいちゃんを乗せた電車は、あつという間に総持寺の方へ向かって発車する。

クリスマスのイルミネーションが残るココで、茫然と立ち尽くしている暇はない。さっさと帰って、再び出かける準備をしなくては。事前にどんなもんか確かめるべく、オフィスの方へ足を運ぶ。

普段もそれほど賑わっているとは思えない駅前商店街だけど、今日はさらに活気が少ないようだ。平日の深夜ぐらいの雰囲気、「やっぱり最後まで送ればよかったかな」と今更ながら、みいちゃんのことを考えてしまう。彼女は彼女なりに、無事に家に帰り着けると言い聞かせながら、オフィスの前を通り過ぎて市役所の方へ歩みを進める。

公園前の交差点で、一度向かいの歩道へ渡った。帰宅には余計な遠回りになるけど、左手にこの後の目的地がある。普段は閑散としているありふれた神社だけど、今日は出店がズラッと並んでいた。流石にまだ早くてもそんなにいないけど、年越しの前後から人が集まってくるのだろうか。

僕は楽しそうな雰囲気の後ろ髪を引かれながら、この後の予定を思い出して、その場を後にした。二三時半までにウチへ再集合して、そこから初詣に出かける。今度はダブルデートではなく、みいちゃんと二人きり。

今更、誰かに見られたらどうしようと、妄想が加速する。とりあえず風呂に入って落ち着こう。彼女から預かった荷物も、洗濯物も、しっかり片付けておかないと。こんなにバタバタな大晦日、初めてだけどめちやくちや楽しいな。

(完)

初出 令和三年一月二三日 ノベルアップ+にて公開